

## 私の中身を象るもの

黄春陽

物心ついた頃から病院が苦手だった。決して診察や注射が怖かったわけではない。散漫した関心が一気に私に集まるあの瞬間。耳馴染みのない私の名前が待合室に響き渡るあの瞬間。その持ち主を探る視線の中、異物であることを自ら晒すように立ち上がり、そそくさと診察室へと入る。私が怖かったもの、それは名前に群がる好奇の目だ。

日本社会では確実に浮く私の名前。聞き返されると小声になっていく私の名前。正直あまり好きにはなれなかった。追い討ちをかける理由がもう一つ、私には通名がない。決して通名を持たない家庭に生まれたわけではないが、私の出生時に母が、この子に名前は二つもいらないと申請を拒否したのだ。最初はなぜなのかわからなかった。名前を呼ばれるだけで視線に押しつぶされそうになるのに、そこから逃げる術もない。未就学児ながらに生き辛さを感じ、低学年になるころには将来帰化することを望んでいた。

それでも時は過ぎ、高校に進学したころには、朝鮮人としての誇りを持ち、ウリハッキョを守りたい、日本社会での不当な扱いを改善したいと思うようになった。それでも名前は未だ、私のコンプレックスだった。

しかし、高校二年生の冬に五日間の短期アルバイトをしたときのこと。アルバイトは初めてではなかったが、短い期間なのにしんどい思いをしたくなく、履歴書に初めて名前のフリガナを日本語読みにした。日本人には見えないが、少なくとも聞き返されないくらいには単純な名前。保護者印を押す母が悲しそうな顔をしたような気がしたが、さほど気にはならなかった。

楽しい職場だった。履歴書の学歴で朝鮮人ということは隠せないが、そんなこと関係なく優しく接してくれる人たちだった。しかし三日目を過ぎ、職場とも打ち解けてきたころから違和感を覚えるようになった。名前を呼ばれるたび、私を指す言葉なのに私に向けられている気がしなくて気持ち悪かった。初めての感覚、今までの私が否定されたかのような一抹の不安。本名に群がる恐怖が冷たいものなら、これは温度すら感じない無機質な、まるで私が幽霊にでもなって同姓同名の人を第三者的に眺めているような虚無だった。でも、そうさせたのは私だ。

名前なんて所詮、ただの記号だと思えるのなら気にならないのかもしれない。だけど私が欠いてしまったものには、どのような願いが掛けられていたのだろうか。自ら手放した先には、何かが欠如した、穴の空いた私があった。

それから私は、本名を使うことに執着するようになった。ピザの宅配、ファミレスの順番待ち用紙、もちろんアルバイト先でも。私の焦燥感ときたら、これはもう一種の呪いだと思う。私はここにあります、朝鮮人である私は今ここで生きています、あなたたちのすぐ隣で平凡な生活を送っていますと、叫ぶような気持ちで私の名前を怯えながら使う。私の名前と接した人達が、一瞬でも私たちの存在を意識しますようにと願いながら、自分でも大袈裟と思うほどに訴えながら。

正直私はまだ、自分の名前を好きになれない。でも、名前の呪縛から解かれたころには、心の底から名前が好きになって、名前と共に何のためらいもなく生きていて、きっとそれは私以外にとってもいい方向に向かっているはずだ。

私が将来子供を育てることになったとき、母親と同じ選択ができるだろうか？私の苦い記憶を思い出しながら、複雑な心境になる。それでも私は、せめて私は、しがらみを断ち切るために今日も本名を名乗る。これが私の向き合い方であり、私なりの親孝行だ。